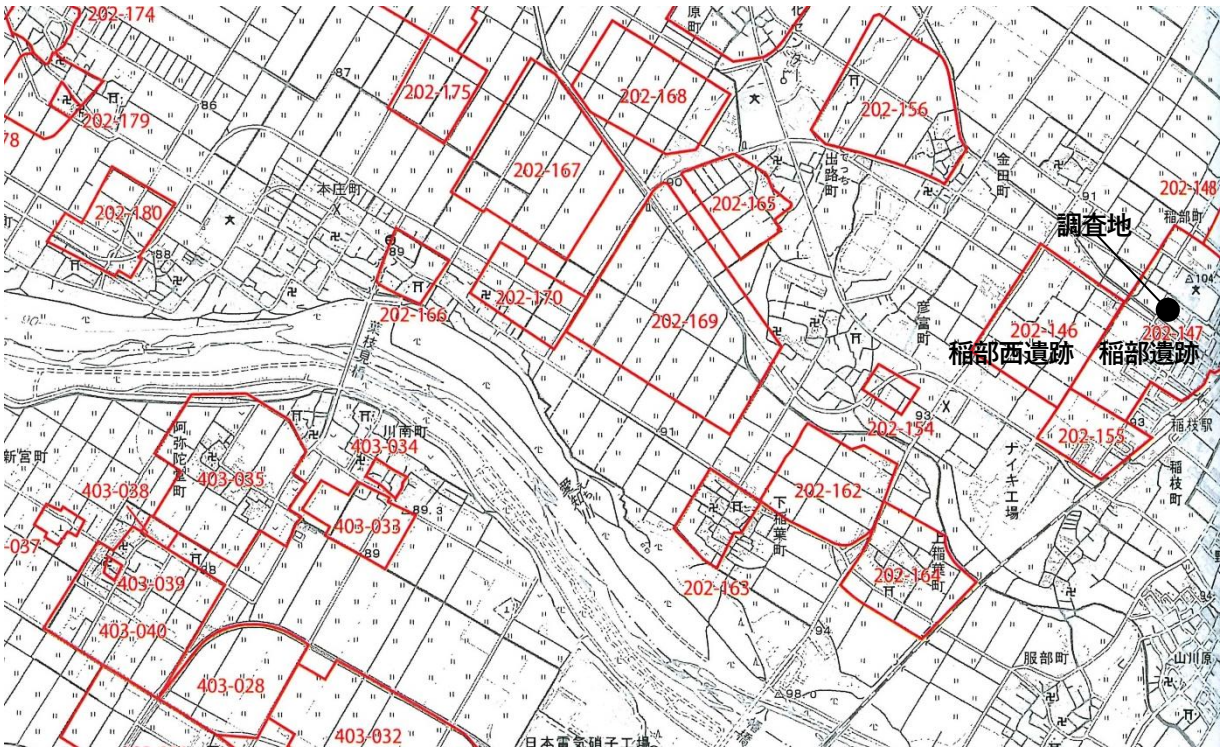
稲部遺跡 19 次・27 次調査

－帯状漆塗繊維製品の発見－

遺 跡 名：稲部遺跡（19 次・27 次）
所 在 地：彦根市稲部町地先
時　　代：弥生時代終末から古墳時代初頭
調査面積：19 次：351.92 ㎡　27 次：105.00 ㎡
調査期間：19 次：令和元年（2019 年）8 月 27 日～令和 2 年（2020 年）1 月 17 日
　　27 次：令和 3 年（2021 年）5 月 13 日～7 月 27 日
調査原因：19 次・27 次：分譲住宅地造成工事
調査機関：彦根市
報告者名：戸塚　洋輔



彦根市稲部遺跡の位置（S=1/25,000）

１．調査の概要

近江湖東地域北部、彦根市稲部町・彦富町に所在する稲部遺跡は、JR 稲枝駅西側の旧愛知川である文禄川と来迎川の間の微高地上に立地する。稲部遺跡ではこれまでに 30 次以上の調査が実施され、主に弥生時代終末から古墳時代初頭（庄内式期から布留式期初頭）の竪穴建物、掘立柱建物、周溝付建物、大溝、方形区画溝、柱列、井戸などが確認されている。遺跡の広がりは東西約 500m、南北約 200m 以上と推定され、文禄川流域における弥生・古墳時代移行期にあたる 3 世紀の大規模かつ拠点的な集落遺跡であることが明らかになりつつある。

今回は、古墳時代初頭の溝で矢入れ具である靫（ゆき）の一部と考えられる帯状漆塗繊維製品などが出土した 19 次・27 次調査の成果について報告したい。

２．遺構

大溝

SD01・SD03・SD04 の 3 条の大溝が開削され、これらの大溝の時期の新旧関係は、SD01 が SD04 を切って掘られているため、SD04→SD01≒SD03 となる。SD04 は幅 2.3m、深さ 0.74m、SD01 は幅 5.0m 以上、深さ 1.15m、SD03 は幅 2.6m 以上、深さ 0.6m である。大溝が埋まった土は、粘土を主体にシルトが混じり、庄内式期の土器が出土した。これらの大溝は、集落外縁の区画、排水、水利に関わる施設として利用されたと考えられる。調査区東側では幅 1.7m の溝 SD05 も確認された。

柱列

SD01・SD04 と SD03 の間には杭痕の集中部 SX03、柱列 SA01・SA02 が位置する。何らかの空間が、柱列によって区画されていた可能性が考えられる。

掘立柱建物

大溝と柱列の間の空間では、柱の配列が 1 間×1 間の掘立柱建物 SB01・SB02 が確認された。SB01 は東西 1.7m、南北 1.3m、SB02 は東西 1.5m、南北 1.6m で、小規模な建物である。

溝

SD02 は、埋まりつつあった大溝 SD01・SD04 を切って開削された南北方向の直線的な溝であり、長さ約 17m にわたって確認された。最大幅 1.6m 以上、深さ 0.5m で、断面の形は逆台形である。溝の周囲には複数の杭痕が溝と平行して確認されている。溝の下の層は、細粒砂～シルトが主体であり、水が流れていたと考えられる。上層は周辺から流れ込んだ土壌で埋まったものとみられる。

調査区の北側には氾濫流路が位置していることがわかっており、氾濫流路に近い位置から SD02 の状況をみると、SD02 の北端部は、SD01 を切り込んでおり本来はさらに北へ延びていた可能性がある。つまり、SD02 は氾濫流路へ接続されていた可能性もある。この南側では溝の周囲に杭痕が多くみられる範囲､溝底に円礫が貼りついて集積された範囲がある。この近くでは、繊維製品、桃の種、ガラス丸玉 1 点が出土した。これらの遺物が出土した位置の南では､溝の東西で複数の柱穴が確認され､残存長 1.51m のヒノキ科の板に接して、帯状の漆塗繊維製品が出土した。板は、溝内あるいは溝の周辺で使われていた製品の一部の可能性が考えられる。このような出土状態から、板と漆塗繊維製品は、ほぼ同時期に溝の中にあったと考えられる。板と漆塗繊維製品には意図的な廃棄との関係性もある程度読み取ることができ、板と漆塗繊維製品が近い時期に溝底へ設置されたと考えてもよいかもしれない。あわせて、板と漆塗繊維製品が出土した位置では、1 間×1 間、東西 1.8～2.1m、南北 1.3m の規模で柱穴の並びが認められ、溝に伴う覆屋などの何らかの施設であった可能性があり、これを SB03 とする。

SB03 の南では、土坑状の窪みがあり、溝の内壁などに杭跡が確認され、貯水機能との関連が考えられる。さらに南では断面がＶ字状になって深い部分があり、このように溝が深い位置の下層では細かい砂やシルトが堆積していた。また、SD02 の下層では主に庄内式期の土器が出土し、わずかに布留式期初頭の土器が混在する。上層では庄内式期末から布留式期初頭の土器が出土し、畿内系土器を含む。開削された時期は庄内式期に遡る可能性が高く、庄内式期から布留式期初頭に機能し、布留式期初頭頃に埋まったものと考えられる。出土土器によると、開削から埋没までは短期間であったとみられる。

以上をまとめると、SD02 は、氾濫流路に近い方からみて、上澄みの浄水の生成と関わるとみられる貼石状の部分、貯水機能との関連が考えられる部分があり、流水が意識され、

導水機能をもつ溝とみられる。SD02 は、氾濫流路から南側の居住域へ水を導く機能をもつ溝であり、周囲の杭跡、柱穴と一体となった導水や浄水に関わるいわゆる導水施設である可能性が考えられる。調査区は、庄内式期の居住域の縁辺部に位置し、大溝が氾濫流路へ向かって収束する地点であり、水辺の祭祀施設が存在した可能性が考えられる。

３．遺物

帯状漆塗繊維製品

SD02 で出土した漆塗繊維製品の破片は 12 点（№1～12）で、内 4 点は長さ 10～20 ㎜程度の小片である。すべての破片は約 40 ㎝四方の範囲内に位置していた。№1・2・6・7 が比較的保存状態が良い。漆塗繊維製品の多くは、同じ組織の織物が、表面を外側に向けて 2 枚重なった状態である。なかでも、№7 は短辺の両端が下へ回り込んで端部は欠損するが、№7 の 2～3 ㎝下では№7 と近い大きさの№9 が出土した。このような出土時の位置関係と表面の突帯の特徴、織物の特徴からみて、№7 と№9 は同じ個体であるとみられる。№7 の下には 2～3 ㎝の厚さで砂が入りこんで、土器細片 1 点を含むことから、漆塗繊維製品と板が溝中にあった時には、多少なりとも水が流れる環境であったことを示す。

なお、SD02 の 27 次調査区側では、長方形の針葉樹材にタケの一種の可能性がある植物繊維を組み合わせた繊維製品が、漆塗繊維製品出土地点から北へ約 5m 離れて出土した。現地の所見では、復元長 21.0 ㎝、復元幅 6.1 ㎝の長方形で、後に述べる 1 号横帯と近い大きさである。

1 号横帯

№7 は、取り上げ時の長さ 19.5 ㎝、幅 4.85 ㎝、厚さ 1 ㎜で、長軸の両端部が残り、経糸の方向に沿って 2 条の細い節状の突帯がある。これに対し、№9 は織組織の内面にあたり、短辺片側は大きく反り返る。№7・9 は、断面形がやや丸みをもつ平たい長方形で、厚さ 2～3 ㎝の同一の帯状の漆塗繊維製品であると考えられ、これを 1 号横帯と呼ぶ。

2 号横帯

一方、№7・9 の北側で板材上面に接して検出された№1～6 は、外面を外側に向けて 2 枚重なった状態の№1・2・6 を含み、突帯は 3 条で、突帯の間隔は 1 号横帯とは異なる。また、№4 には硬質な繊維を用いた幅 9 ㎜の筒状の織物が X 字状に交差して縫い付けられており、紐通し状の部分である。№1～6 を 2 号横帯と呼ぶ。

素材と織組織

自然科学分析によると、漆塗繊維製品は、撚りをかけた絹糸を経糸とし、植物繊維を緯糸に使った綾織物で、黒色物質を混ぜた黒漆が塗られている。断面の観察では、複数の漆の層が観察されている。織物の組織は、いわゆる綾織という高度な技術により、綾織物は、経糸が緯糸を 2 本越し、交差する織組織である。外面には経糸が密に表れて突帯があり、漆膜がよく残る一方、内面の漆膜は外面ほどよく残っていない。漆は外面から塗られ、何らかの製品に巻かれていた可能性が高い。

年代

SD02 出土土器からみて漆塗繊維製品の時期の下限は、布留式期初頭に併行する時期であり、古墳時代初頭と考えられる。また、土器による相対的な考古年代と暦年代を比較検討するために、漆塗繊維製品№1・№7、板の放射性炭素年代の測定を行った。放射性炭素

年代は、素材となる漆と絹糸の年代に由来するが、漆と絹糸の性質からみて、放射性炭素年代は漆塗繊維製品の製作年代ときわめて近い年代を示すと考えられる。測定結果によると、漆塗繊維製品は、2 世紀前半から 4 世紀前半（弥生時代後期後半から古墳時代前期）の漆と繊維の使用が推測され、共に出土した板は 3 世紀前半から 4 世紀中頃の暦年代を示す。このことから、漆塗繊維製品の暦年代は、弥生時代後期後半から古墳時代前期に相当し、SD02 出土土器の下限である布留式期初頭の時期とも矛盾しない。土器による考古年代と理化学的年代から導き出される漆塗繊維製品の年代の下限は、3 世紀第 2 四半期末頃である可能性が高いと考えられる。

４．まとめ

冒頭でも述べたが、帯状漆塗繊維製品と最も近い特徴をもつ遺物として関連性が俎上に挙げられるのは、矢を入れる武具として用いられ、古墳時代前期の古墳に副葬された靫である。靫は、織物、繊維、木、革、漆などの有機質で構成される筒状の矢入れ具である。稲部遺跡で出土した帯状漆塗繊維製品と古墳に副葬された靫との共通点は、横帯と紐通しの二つの部位と織組織である。1 号横帯は帯状を呈し、靫で形が類似する部位として横帯がある。織物であるという点だけでなく、細長い帯状である点、外面に節状の突帯を持つ点、漆を塗布する点で類似する。次に、2 号横帯では硬質な繊維を用いた紐通し状の部分が伴い、この紐通し状部と特徴が近い繊維製品が、紐通しとして古墳副葬靫の横帯にも備わる。靫の紐通しも硬質な繊維を用い、福井県鼓山古墳、御所市鴨都波 1 号墳、胎内市城の山古墳などの例と同様な繊維組織と構造であるとみられる。さらには、1 号横帯と 2 号横帯は漆塗の綾織組織で、外面の大半は綾杉文様をもつが、これらと近い綾杉文様をもつ横帯が備わる靫として、鼓山古墳、尼崎市水堂古墳などの例がある。

このように、稲部遺跡で出土した帯状漆塗繊維製品は、古墳に副葬された靫との共通点が認められ、1 号・2 号横帯は、織物を用いた靫の横帯の部分であると考えられる。矢筒部本体は残っていなかったが、革ないし繊維の有機質を用いた矢筒部に巻かれた横帯であったと推定される。そうであれば、靫の一部が、集落遺跡の導水に関わる溝で長大な板、ガラス丸玉、桃の種、小形の土器などと共に出土したことになる。これは、浄水を利用した水辺の祭祀において、有力な首長の権威を誇示した威儀具として靫が使用されたことも考えられよう。稲部遺跡出土の靫は、古墳に副葬された靫よりも古く、集落遺跡で出土したことから、靫の製作と使用のはじまり、古墳の築造が始まりつつある古墳時代初頭の社会を考えるうえで重要である。それだけでなく、日本列島の綾織物としてはきわめて古く、3 世紀の紡織技術を知るうえでも重要な情報を提供するものと考えられる。

参考文献

戸塚洋輔・森岡秀人・吉田広・若林邦彦・東村純子・植田直見・小村眞理・木沢直子 2021「彦根市稲部遺跡出土漆塗繊維製品の調査」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

植田直見・小村眞理・木沢直子・森岡秀人・吉田広・若林邦彦・東村純子・戸塚洋輔 2021「彦根市稲部遺跡出土漆塗繊維製品の自然科学的研究」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

戸塚洋輔 2022「滋賀県彦根市稲部遺跡出土帯状漆塗繊維製品の発見と課題」『古代文化』第 74 巻第 2 号 公益財団法人古代学協会

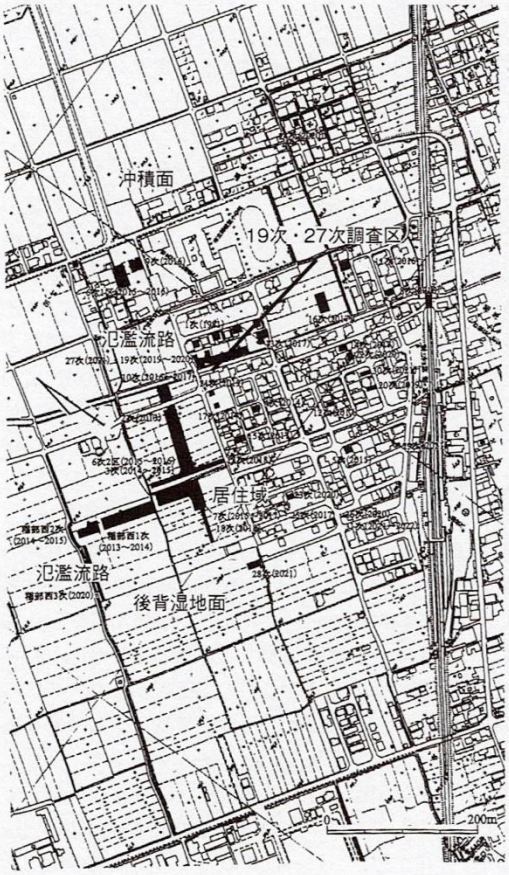


図1　稲部遺跡19次・27次調査区の位置

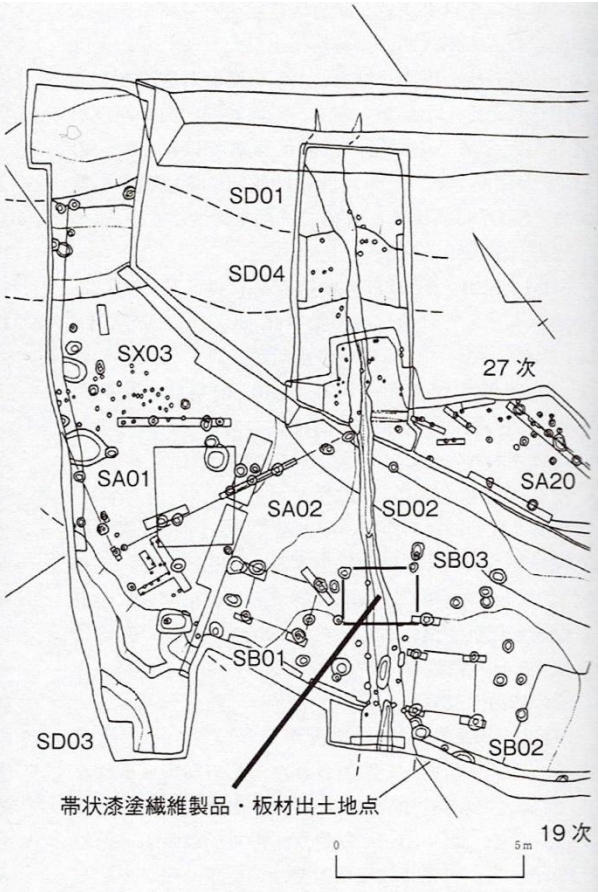


図3　稲部遺跡19次・27次SD02周辺遺構配置図

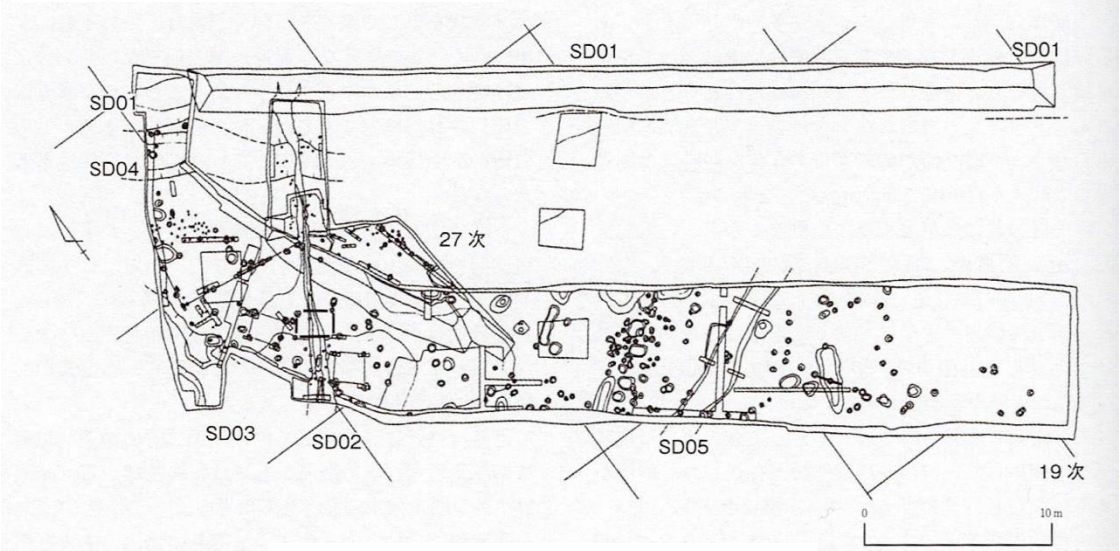


図2　稲部遺跡19次・27次調査区遺構配置図

図1・2・3は（戸塚2022）を改変

写真１　19 次調査区全景（北から）

写真２　19 次調査区全景（北東から）

写真３　SD02（南から）

写真４　SD02（北から）

写真５　SD02　２号横帯出土状況　（北から）

写真６　SD02　１号横帯と板の出土状況　（北から）

写真７　SD02　１号横帯出土状況　（東から）

写真８　SD02　板の出土状況　（北東から）

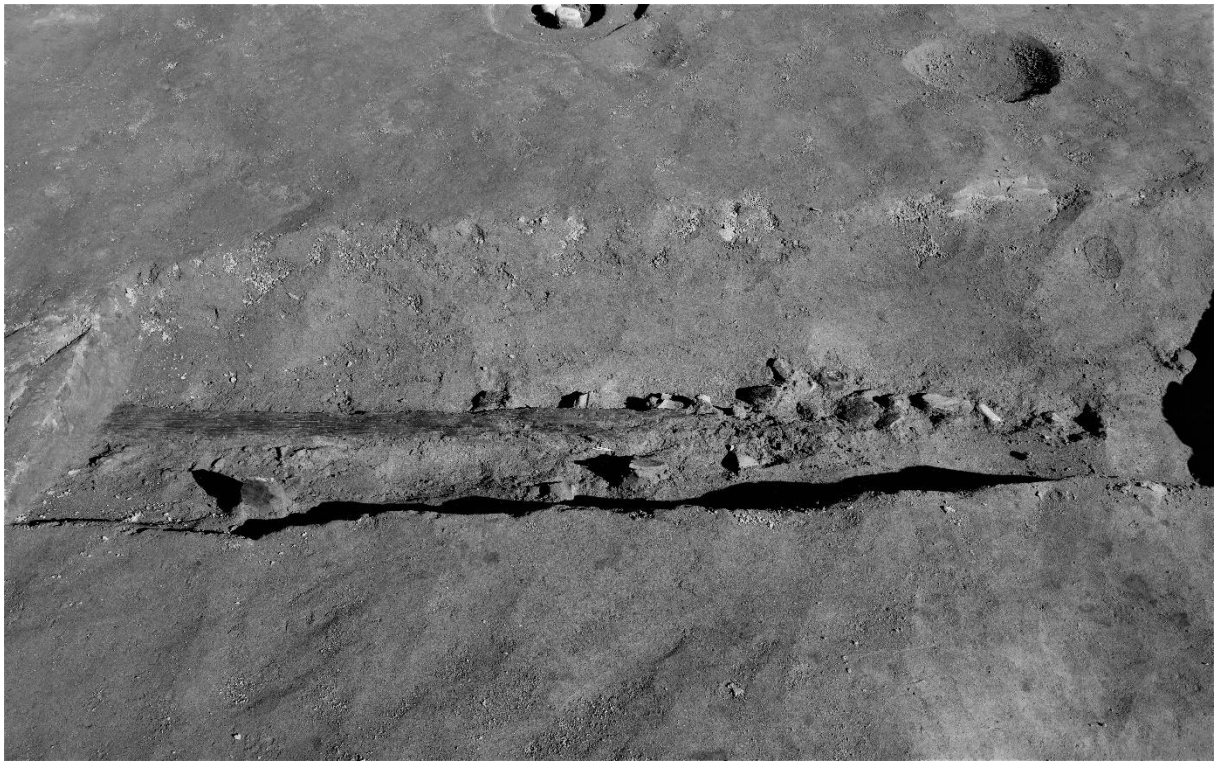


写真9　SD02　板と土器の出土状況（西から）

写真10　SD02 土層断面（南から）

写真 11　27 次調査区 SD02（南から）

写真 12　27 次調査区 SD02　礫の集積状況（南から）

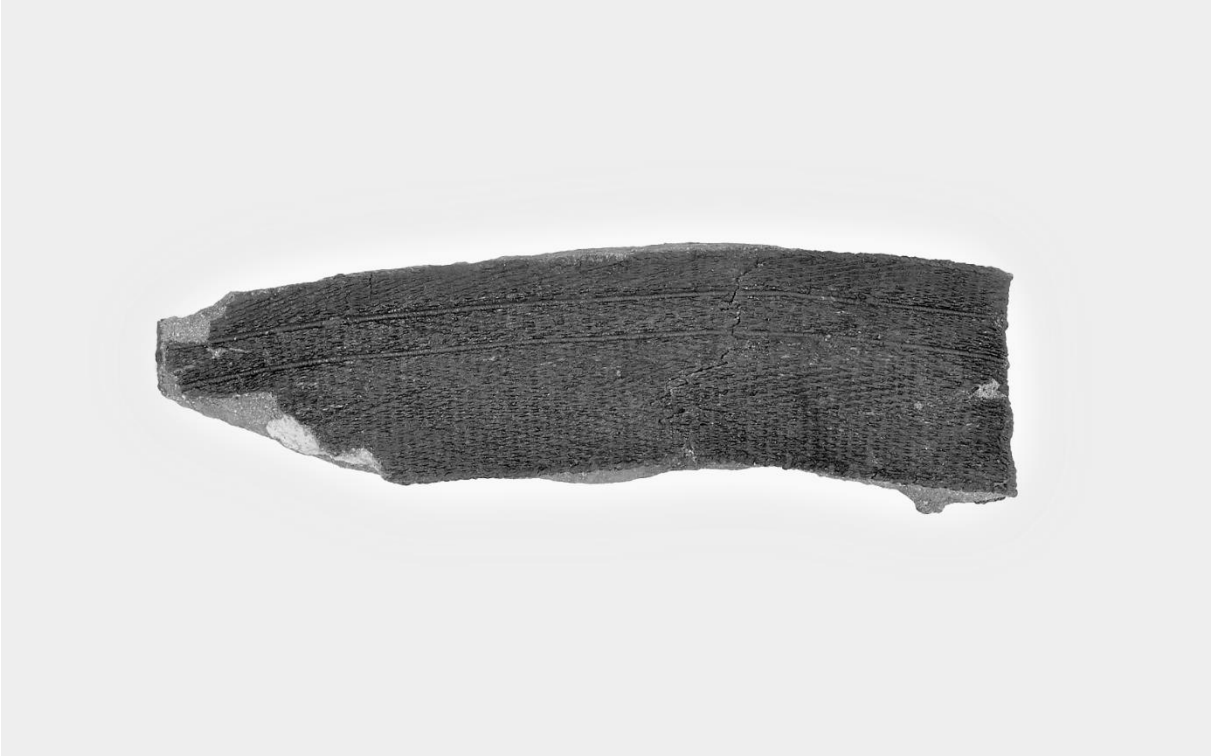


写真 13　帯状漆塗繊維製品（1 号横帯）

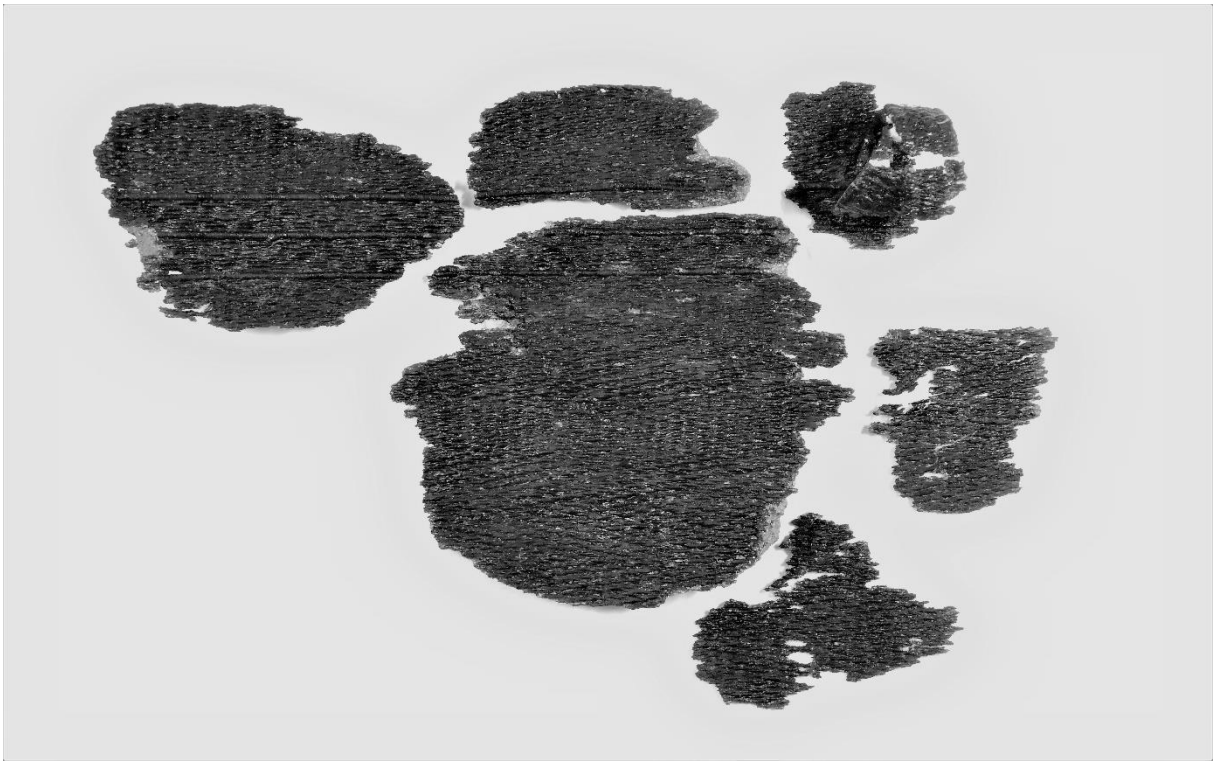


写真 14　帯状漆塗繊維製品（2 号横帯）